

■林忠正 美術商。ゴッフルと親交して浮世絵はじめ日本美術を欧米に紹介し、印象派絵画を日本に初めて紹介。

はやしただまさ

パリー来航・1853＝ 越中国高岡で、代々蘭方医長崎言定の次男に生まれる。本名長崎志芸二。

桜田門外変・1860＝ 7歳：

生麦事件・・・1862＝ 9歳：

明治維新・・・1868＝15歳：この年、父が援助した有能な従兄林太仲が藩大参事に任命され、この地方の最高位の家となる。

初の日刊新聞1870＝17歳：父から将来を嘱望されて、林太仲の養子となり、林忠正と名乗るとともに、太仲の弟磯部四郎を追って上京し、その勧めで、村上英俊のフランス語学校(達理堂)に入学。

廃藩置県・・・1871＝18歳：父やはり従兄の四郎に従って、大学南校(のちの東大)の授業を受け始め、

明治6年政変 1873＝20歳：

この間、四郎は法律学校に移り、
初の民間工場1875＝22歳：この年、四郎が政府派遣留学生として渡仏したことに衝撃を受ける。
続いて来るように勧められるも、養父太仲は権力乱用で郷里を追われる身となっていたが、

西南戦争・・・1877＝24歳：卒業目前の大学南校を中退し、委細かまわず渡仏。

大久保暗殺・1878＝25歳：西洋に最初に工芸品を輸出した起立工商会社に職を得、パリ万博の日本美術品展示にも従事し、生涯の友になるゴッフルと初対面。万博終了とともに解雇されるも、フランスに留まることを決意。

沖縄県編入・1879＝26歳：日本の警察の使節団が来仏、団員の一人が親友だったことから、彼らとヨーロッパ諸国の刑務所視察に回ることになり、その機会に諸国の美術館を訪ね、それら全てを「旅行記」に記録。日本美術の価値も認識。起立工商の副社長若井に誘われて協力するうち、自らも日本美術の専門家と目されるようになり、

・・・1880＝27歳：

明治14年政変1881＝28歳：退職して、三井物産に再就職すると、来欧した有栖川宮に続き、伊藤博文の通訳を依頼されて懇意となり、その勧めで、日本美術の西洋からの評価維持を訴える手紙を関係筋に送る。

岩倉具視没・1883＝30歳：ルイ・ゴッスが企画した日本美術回顧展への出品と彼の「日本美術」出版に協力、自立できると考え、若井とともに「若井・林商会」を創立、たちまち日本最良たちのお気に入りの場となる。この年、ゴッフルの日記に初登場し、彼からマチルド皇女を紹介され、そのサロンの常連客となって行く。

帝国大学始・1886＝33歳：「パリ・イリュストレ」誌の編集長から依頼され、日本に関する特別号を全面執筆。美術商の第一人者として8年ぶりに帰国。以後、東京で事業を手伝う料亭の中居さと子と知り合った後、美術品求めて渡米、

国民之友始・1887＝34歳：パリに戻り、

初の対等条約1888＝35歳：中国経由で再帰国、

帝国憲法発布1889＝36歳：自らを大きく越える林の存在を認めた若井が引退し、愛人シュザンヌとも別れ、公私とも一人になる。この年、世界初の歌麿研究書を出そうとするゴッフルへの協力を承諾。

帝国議会始・1890＝37歳：外山正一・森鷗外とともに、明治美術会で講演し、青年画家らに内外美術界への的確な認識を与える。

大津事件・・・1891＝38歳：この年、ゴッフルの歌麿研究書が出版され、称賛を受ける。

日本美術で一流だったジークフリート・ビングの店と並ぶほどになって、様々な確執を抱えながらも、黒田清輝・久米桂一郎らに在仏の青年画家らも支援、

大本教・・・1892＝39歳：帰国すると、親交する版画商小林又七に働きかけ、日本初の浮世絵展覧会を開催するも見学はまばら。
郡司千島探検1893＝40歳：シカゴ万博出品に先駆け、帝国ホテルで鈴木長吉の「十二の鷹」を展示、絶賛されるも、現地では展示場所が悪く客を集められず、以後、この作品は数奇な運命を辿る。パリに戻り、

日清戦争始・1894＝41歳：日本へ贈る予定の「ポール・ルノワールのデッサンとエッチング展」開催し、ルーブル美術館に刀の鏝コレクションを贈呈。何れも自らカタログを制作。

日清戦争終・1895＝42歳：ゴッフルが北斎の論を発表したことから、ビングとの間が紛糾。

白馬会・・・1896＝43歳：ゴッフルの死去に衝撃を受け、自らの事業にも行き詰まりを感じ、石油事業の話を知ると、浅野総一郎とともに、ロシアを訪問するも幻滅。この間、さと子と正式結婚し長男も誕生。西園寺・伊藤の尽力で、

子規句歌革新1898＝45歳：4年後のパリ万博に向けての日本の万博事務官長に就任すると、新聞紙上でたたかれるようになるが、

ピアノ国産化・1900＝47歳：パリ万博の日本公式カタログに長い序文を書き、開催中にはエリゼ宮で大統領に接見。日本美術回顧展が大成功を収め、日仏協会の発足に至り、レジオン・ドヌール三等勲章を受け、日本の新聞も沈黙。この間、無償で働きづめだったことから、

田中正造直訴1901＝48歳：休息すべく帰国したが、弟萩原正倫危篤の知らせでパリに引き返すも、まもなく死去して衝撃を受け、

教科書疑獄・1902＝49歳：店に残っている全ての作品について(重要なものは秘匿)正確なカタログを制作して競売にかけて清算、

日露戦争始・1904＝51歳：人年鑑からも消え、

日露戦争終・1905＝52歳：親友らには惜しまれながら、ついにフランスと永遠の別れをして帰国するとまもなく、病に倒れ、

満鉄発足・・・1906＝53歳：没した。